

## 実践研究

## 次世代育成における教育連携プログラムの開発

庄子幸恵 太田四郎 作山美智子<sup>1)</sup> 庄子弘子<sup>1)</sup> 松原 匠<sup>2)</sup>

Yukie Shoji, Shiro Ota, Michiko Sakuyama<sup>1)</sup>, Hiroko Shoji<sup>1)</sup>, Takumi Matubara<sup>2)</sup>: Development of the education cooperation program in next generation upbringing. Bulletin of Sendai University, 44 (2) : 121-133, March, 2013.

**Abstract:** This report is an instruction report by the Sendai University "research funds based on the study plan" from 2009 through 2010. We assumed reinforcement of national language the center as education support from the first grader of the child club to a fourth grader after school and were concerned for two years. I performed in particular the support to children with the goal of forming power to build power to read, power to write, upbringing and personal relationships of the communicative competence.

I report the instructional activity that kept the local cooperation such as a university student, a university teacher, a resignation teacher, a local lecturer, the institution staff at school in the environment that is not a private supplementary school here.

**Key words:** The child club after school, National language reinforcement, Reading aloud support, Regional alliances education

キーワード: 放課後児童クラブ, 国語力強化, 音読支援, 地域連携教育

## I. はじめに

宮城県は、平成 17 年度から「みやぎらしい協働教育」として、学校教育を地域の教育力で支援していく「学校教育支援」を推進している。<sup>1)</sup> また仙台市においては、平成 20 年 11 月 21 日における仙台市教育懇談会において、今後「教育習慣の形成」を重視し、「緊密なパートナーシップを築きながら取り組む」ことが確認された。仙台市教育委員会は平成 21 年度から地域と学校を結ぶ「学校支援地域本部」の設置校を拡充し、授業や課外活動に「地域の教育力」を

生かそうという取り組みが開始されている。<sup>2)</sup> 宮城県や仙台市の地域の学校教育支援活動を受け、私たちは S 町において、平成 21 年から平成 22 年の約 2 年間、F 小学校放課後児童クラブに所属している児童への教育支援を行い、次世代育成における地域での教育連携プログラムの構築を試みた。その内容について今回報告する。

## II. 研究目的

全国都道府県教育長協議会では、平成 21 年

1) 東北文化学園大学 2) 仙台大学大学院

度に「家庭・学校・地域の連携による教育力向上のための方策について 一家庭・学校・地域の教育力の向上を図る仕組み作り」の中で、国の「教育振興基本計画」において「社会全体で教育の向上に取り組む」ことが、今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策の基本的方向として位置付けられたことから、全国で行われている様々な取り組みや仕組み、また、家庭・学校・地域の教育力を向上させる方策について調査研究を行っている。また、同じく平成21年度に岩手県では、「社会教育と学校教育の連携・協力に関する研究」の中で、社会教育と学校教育の連携・協力のあり方について文献・調査研究を行っている。<sup>3)</sup>

今回私たちは、全国の学校と地域の教育連携を参考に、大学と地域の小学校に所属する「放課後児童クラブ」との教育連携を通して、目指すべき支援体制や協働のあり方の開発を目的に研究に取り組んだ。

### 1. 用語の定義

今回、教育支援について以下のように定義した。<sup>4)</sup>

1) 教育連携：学校現場が求めるニーズに対して地域が教育を支援すること

## Ⅲ. 研究方法

### 1. 研究対象

平成21年度：調査対象は、M県S町F小学校放課後児童クラブに登録している小学校1～5年生までの30名を対象とした。期間は平成21年5月～12月までの8か月間である。

平成22年度：調査対象はM県S町F小学校放課後児童クラブに登録している小学校1～4年生までの37名を対象とした。期間は平成22年4月～12月までの9か月間である。

### 2. 方法

平成21年3月にS大学生3、4年生10名を中心に学生を中心とした研究グループを作り、

平成21年5月より、M県S町F小学校放課後児童クラブに午後3時から6時までの間に1

日あたり学生が数名ずつ、週1～2回程度定期的に訪問を行った。その後、児童クラブに参加している児童へ音読を中心とした国語力の支援、①音読会、②硬筆、③書道、④遊びの支援を行った。そしてその子どもたちの成果を発表する、保護者を交えた音読発表会を年に2回実施した。

その後、平成22年4月からは、学生が15名関わり、前年度と同様に児童への教育支援を行った。また、音読発表会後に参加児童に発表会の感想についてアンケートを行った。

## 3. 倫理的配慮

児童と児童の保護者に対し、本研究の目的を説明し、質問紙の提出をもって調査協力の同意とした。また、得られたデータは本研究の目的以外には使用されず、守秘義務を守ること、アンケートに答えなくても不利益を受けることはないことについて、口頭で説明を行った。

## Ⅳ. 結果

### 放課後児童クラブについて

「放課後児童クラブ」は、保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校等に通う小学校1～3年生に就学している児童、および特別支援学校小学部の児童及び小学校4年生以上の児童に、遊びや生活の場を提供し、その健全な育成を図る事業であり、女性の就労の増加や少子化が進行する中、仕事と子育ての両立支援、児童の健全育成対策として重要な役割を担っているところである。<sup>5)</sup>

### 2. 平成21年度活動内容

(活動目標、年間活動内容、活動延べ日数については表1、表2、表3を参照)

#### 1) 国語力の強化(音読支援)

平成21年4月より学生支援メンバーが、各学年の担当を決め、各学年にあった教材選びを行った。教材については、大学教員、児童クラブ職員と話し合いの上決定した。教材については、児童の慣れ親しんだ国語の教科書から選定し、小学1年生は「くもはがようし」、2年生は「お

がわのはる」, 3～5年生は「どきん」に決定した。教材をもとに学生が指導略案を作り, 研究室で学生を相手に演習を行い, 音読練習のイメージをつけさせた。平成21年5月より, 週2回学生が各学年に入り, 教科書の教材の音読練習を行った。音読の練習は1年生, 2年生, 3～5年生とし, 各学年30分間程度行った。しかし, 教科書の内容に児童が飽きてしまったことから, 6月には音読練習を週1回とし, 内容を教科書から絵本や詩の本に変更した。1年生は「卵」, 2年生は「だるまさんがころんだ」, 3年生は「早口言葉」を選んだ。音読の方法について, 1回目は学生が読み方の手本を示し, 2回目は学生が読んだ後, 1行ずつ読み, 3回目は全員であわせて読むことを意識して指導を行った。また, 音読練習の場所を今までは同じ時間に数か所の場所で行っていたものを, 固定した1つの部屋で学年順に練習を行うようにした。このことより, 児童に緊張感が芽生え, 一人一人が集中して取り組むことができるようになった。その後7月からは8月の音読発表会に向けて新しい教材を選定した。(1年生「うらしまたろう」, 2年生「めのみどあけろ」, 3年生「葉っぱのフレディ」) 後期の10月からは第2回音読発表会に向けて, 新しい教材(1年生「あいしてる」, 2年生「林の光」, 3年生以上「論語」)を選定した。前期と比べ, 今回は長い文章を暗唱し, 児童に一人で発表する機会を与えた。学生の児童に対する指導も, 各学年の教材にあった練習方法について昼休みに研究室でミーティングを行った。進め方として, 1, 2年生は教材の文章を模造紙に書き, ホワイトボードに貼りつけ, 集中できるようにした。3～5年生は一人一人にどの論語が読みたいかを児童に決めさせ, 自己責任感を持たせるようにした。発表会のある, 12月からは学年合同音読として, 「永訣の朝」を教材として選び, 音読カードを作って自宅でも音読練習ができるようにした。また, 音読を自宅でしてきたときは, 児童クラブに自分の名前を書いてある模造紙にシールを貼って視覚的にも音読の努力が目に見えるようにした。自宅での練習により, 児童は暗唱や音読をすらすらと読めるようになった。

## 1) 国語力の強化(書道)

6月より, 月に1回外部講師を招き, 書道教室を行った。子どもたちは初めて習字と触れ合い, 筆や墨に興味を強く持っていた。講師の先生が筆で字を書いているときは, 集中して先生の手の動きを見つめていた。習字の練習も回数を重ねていくうちに, 先生から筆の持ち方や半紙の裏表を注意されなくても自分から行うことができるようになった。

1) 音読発表会(平成21年8月1日, 12月19日)  
音読練習の集大成として音読発表会を8月と12月に2回行った。

(1) 8月1日第1回音読発表会: 児童30名が参加した。

音読教材: 1年生「たまご」・「うらしまたろう」, 2年生「だるまさんがころんだ」・「めのみどあけろ」, 3～5年生「早口言葉」・「葉っぱのフレディ」

会場: S大学B棟中教室

児童の様子: はじめてくる場所に最初は緊張している児童が多かったが, しばらくすると, 掲示物(書道教室での習字等)を見たり, 一緒に楽しく話すなどの様子が見られた。児童の席は事前に指定し, 支援の必要な児童には学生がそばにつき, 見守りを行った。しかし, 大学にはじめてきた児童がほとんどだったため, 立って歩いたり, 廊下を走る児童が多くみられた。音読会が始まると顔が緊張し, いつもより声が小さくなり, 会場の後ろまで声が届かなかった。また, 発表日の前日に本の持ち方や姿勢について指導したため, 当日にできている児童が少なかった。

(2) 12月19日第2回音読発表会: 児童30名が参加した。

音読発表会2週間前から音読練習の回数を増やし, リハーサルを開始した。書道教室も発表会に会場に飾る作品や3～5年生の論語を書き始めるなどの準備を行った。1週間前になると毎日音読練習にマイクを使ったりリハーサルを行った。児童がうまくいかないところや細かい動きのミスも何回も繰り返し練習させ, 遅れている児童には学生がそばについて支援を積極的に行った。最後の総練習では児童一人一人が発



表会前日の緊張感を持ち練習する姿勢に自覚が見られ、今までで一番音読も態度も優れたものとなった。

発表会当日、児童らは発表会が2回目ということもあり、発表を大変楽しみにしている様子であった。今回も児童の座席は指定席とし、学生が誘導を行った。また、前回の反省を踏まえ、マイクとスピーカーを準備した。児童は司会の指示を守り、会の進行もスムーズに行うことができた。一部マイクの調子が悪かったり、マイクからの距離が遠い児童の声が聞き取りにくい場面も見られたが、早くからリハーサルを始めたことにより、本の持ち方や読む姿勢もしっかりできていた。また、児童一人一人が発表会の流れを理解し、今まで頑張ってきた成果がしっかりと出た発表会となった。

## 2) 平成22年度活動内容

(活動目標、年間活動内容、活動延べ日数については表1、表2、表3を参照)

### 1) 国語力の強化(音読支援)

S大学の学生15人が、放課後児童クラブを週2回の割合で15時から18時の時間帯に訪問し、音読教材の選定から発表会の開催まで継続的に教育的支援を実践した。そして、グループ分けした子どもたちを学生がそれぞれ学年担当制で担当し、対象のグループに応じた到達目標を設定した。また、指導内容の導入部分に発声練習やレクリエーションを実施するなどの工夫を凝らした。学生は月に1度ミーティングを行い、その都度指導教員より、報告やアドバイスなどの指導を受けた。音読支援の内容としては、前期(平成22年5月7日～7月31日)と後期(平成22年10月5日～12月18日)で異なる支援を展開した。前期の1年生は、大きな声を出して読むことを基本として、教材には子どもたちには語呂が良く、覚えやすく読んで楽しめる谷川俊太郎作の詩を選んだ。また、18～19人を2チーム編成とし、互いに競い合うことによって音読練習や発表に対する意欲を刺激した。後期は最初からグループに分け、一つの詩をかけ言葉で読みあう方法などを取り入れた。2年生

は前期に数多くの作品に触れるために短編集を選んだ。あこがれの人の言葉に触れて親しみを持てること、さらには言葉の意味を理解することを目標とした。また、あいさつや「礼」の仕方など、基本的なマナーについても指導を行った。3・4年生では、「文章の意味を理解して読むこと、聞いている人に伝わるように読むこと」を目標に研究に取り組んだ。論語を読むことで、古典特有の言い回しになれて、言葉の奥深さを知ること、論語に書かれている文章の意味を理解することをねらいとした。後期は2～4年生までを一つのグループとして支援を展開した。教材もそれに合わせ、あらかじめ子どもたちに読むところを振り分け、役割を分担して読み進める形をとった。また、学年が違うということ意識し、高学年の子が低学年の子どもたちに対して読むスピードを合わせたり、声を出してリードするという事も意識して指導を行った。また、今回の音読支援では、小学校の教材研究を基に、文章の難易度・内容・感動、読みやすさ・音の響きについて検討を重ね、音読教材を選定した。

### 2) 国語力の強化(書道)

昨年に引き続き外部から書道講師を招き、月2回書道教室を開催した。学校で書道を習っていない低学年の児童にとって、書道教室は、筆と墨を使って文字に触れ合うことができる貴重な体験となった。中学年の児童にとっても、学校で習う書道とは違い、お手本通りではなく、感性の赴くままに書道に打ち込める時間となった。前期で1、2年生は「顔を模したもの」、3、4年生は「風」を題材として取り組んだ。書道の作品に押すはんこ作りを行った。みんな集中して取り組んでおり、はんこにも子ども一人一人の個性が出ていてよい作品が作れていた。後期は「菊」を取り上げ、季節を感じながら行われた。菊の花を見たり触ったり、においをかいだりしながら取り組んでいた。後期は題材を1、2年生が「木」、3、4年生が「兎」を題材として行われた。歌の「待ちぼうけ」をモチーフにしており、実際に歌を歌うなど、とても楽しい雰囲気の中に取り組んでいた。「木」と「兎」

次世代育成における教育連携プログラム開発

は象形文字のように木と兔をかたどったもので、子どもたち一人一人で表現の仕方が違い個性が出ていてユニークな作品となった。書道の作品は、7月31日、12月18日の音読発表会で掲示を行い、書道の成果を発表した。

3) 音読発表会 (平成 22 年 7 月 31 日, 12 月 18 日)

(1) 第 3 回音読発表会: 児童 37 名が参加した。  
音読教材: 1 年生「なつのゆきだるま」「ことわざ」2 年生「きっと勇気がわいてくる魔法の言葉」3,4 年生「論語」「私と小鳥と鈴と」合同発表「枕草子」

会場: S 大学 B 棟中教室

児童の様子: 2 年生以上の子どもたちは、去年音読練習を経験している子どもたちが多いこともあり、音読についてはスムーズにできていた。しかし、慣れていて分、途中手を抜いてふざけてしまうという場面も見られた。また、個人発表の練習では、声が小さかったり、読みたくないという子どもたちもいたが、本番では大きな声で読むことができており、

大勢の人がいる中で堂々と発表していた。そして 3 年生以上は「論語」を暗唱するという難易度の高い課題をこなしていた。

(2) 第 4 回音読発表会: 児童 37 名が参加した。

音読教材: 1 年生「にじ」「もしも」「きりなしうた」2~4 年生「世界は一冊の本」「リサとサンタクロース」合同発表: 「大きな木」「永訣の朝」

児童の様子: 後期の発表会では、前期が個人に対しての音読支援が中心だったので、全体での発表を意識し、練習を行っていた。前期の発表会を踏まえ、子どもたちも慣れてきており、畏縮したりせずに大きな声でしっかりと音読が行えていた。また、今回あらたな試みとして、全学年混合グループでの発表(縦割り)と、1 年生と 2~4 年生に分けたグループ(横割り)での発表を行った。1 年生はあらかじめ役割を決め、それぞれ自分がどこを読むのかをしっかりと理解していた。2~4 年生は一つの本の内容を 3 つの役割にわけ、それぞれが自分のパートをしっかりと声に出して読んでいた。また、

縦割りの発表として行った「永訣の朝」と「大きな木」は、パートの分け方が難しく、ペースを相手にあわせることが難しかったが、子どもたちはそれをしっかりと合わせて発表することができていた。

表 1 各年度の活動目標について

平成 21 年度の活動目標
1. 学習習慣の形成
2. 健康な生活習慣の形成
3. コミュニケーション能力の向上 (家族内世界からの拡大)
4. 人間関係の形成 (仲良く遊ぶスキル)
平成 22 年度の活動目標
1. 学習習慣の持続, 自主学習の習慣形成
2. 健康な生活習慣の継続, 運動能力の向上
3. 読む力, 書く力, 健康な体づくりを行う

表 2 放課後児童クラブの主な年間活動内容

月	主な活動
4 月	・学生: 新規協力学生の呼びかけと参加希望学生への指導 打ち合わせ: ①昨年の活動内容 ②今年の目標 ③今年の主な活動内容 渉外・連携: 船岡放課後児童クラブ館長, 職員との打ち合わせ 活動: ①新メンバーによる事前ボランティアと事前活動 ②教材選択
5 月	活動: 次世代育成支援の開所式 学生運営: 学生メンバー間での申し送りや打ち合わせ ① 打ち合わせを週 1 回定例会とする。②児童クラブでの活動は週 2 回 ③ 児童クラブ学年別担当学生の決定 ④児童クラブ新 1 年生の支援方法 習字教室: 習字は月 2 回とする
6 月	学生運営: ①活動内容の情報交換と教材の進め方について ②児童クラブでの子どもたちの接し方について 教育: 学生・児童クラブ職員・指導教員との教材検討 活動: 4 年生が教育実習期間のため, 担当を 3 年生が受け持ち, 活動を行う
7 月	活動: 七夕会 ① 音読発表会に向けて活動日を増やし, 総練習の実施 ② 音読発表会の実施 ③ 学生と教員で前期反省会
10 月	活動: 児童クラブの子どもたちに縦割り制を導入した指導体制とする ① はっきり話す, 発声練習の強化 ②後期の教材選定
11 月	活動: 長い文を読む力と友達と調和して読む力を養う ① 学年ごとに特徴を生かした指導を行う 連携: 学生・児童クラブ職員・教員との発表会までの練習と情報交換
12 月	活動: 発表会前の練習強化と総練習 ① 音読発表会の実施 ② 音読発表会の学生と教員の反省会

表 3 放課後児童クラブでの活動延べ日数

平成 21 年度	4 3 日間 (1 2 9 時間)
平成 22 年度	5 3 日間 (1 5 9 時間)

#### 4. アンケート結果

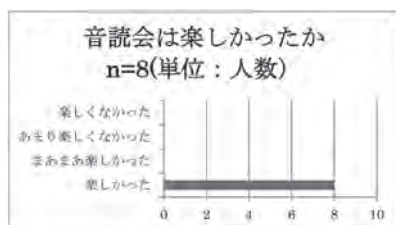
発表会終了後に参加児童、保護者に対して発表会の内容についてアンケートを行った。

平成 21,22 年度アンケート結果

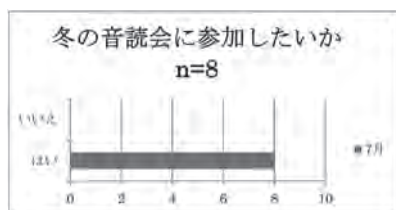
平成 21 年度は第 1 回，第 2 回の音読発表会終了後，平成 22 年度は第 3 回，第 4 回の音読発表会終了後にアンケート趣旨を児童と保護者に説明し同意の上，アンケートをとり，以下の結果が出た。

表 4 平成 21 年度第 1 回音読発表会児童アンケート

##### 1. 音読会は楽しかったか



##### 2. また冬の音読会に参加したいか



##### 3. どんな読み方をしてみたいか

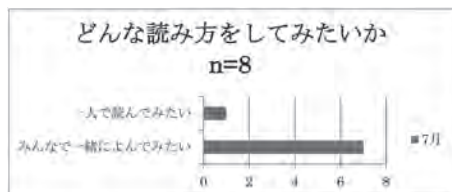
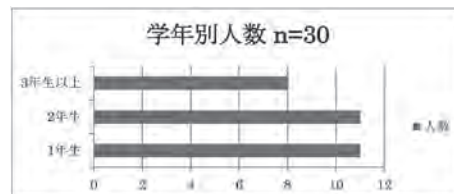
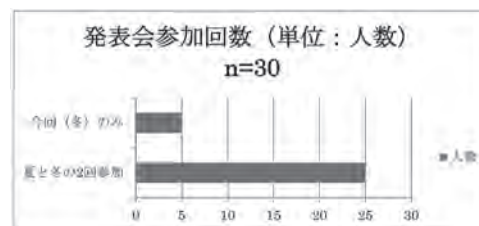


表 5 平成 21 年度第 2 回音読発表会児童アンケート

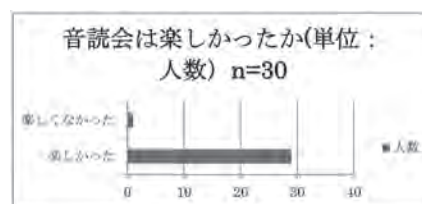
##### 1. 参加学年



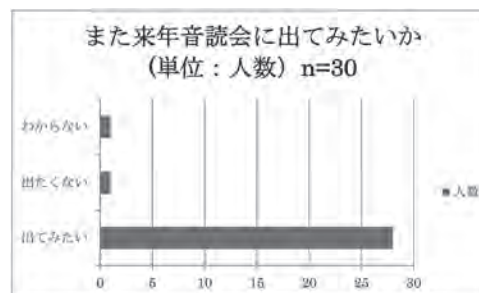
##### 2. 音読会発表会に出たのは何回目ですか



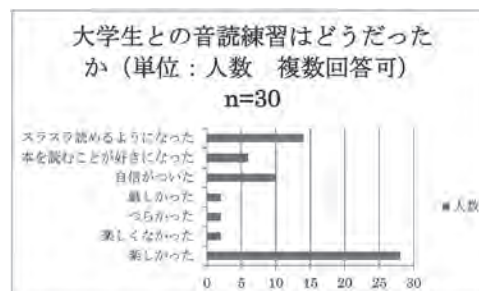
##### 3. 音読会は楽しかったですか



##### 4. また来年も出てみたいと思いますか。



##### 5. 学生との音読練習は楽しかったですか。

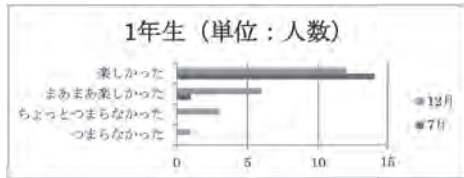


次世代育成における教育連携プログラム開発

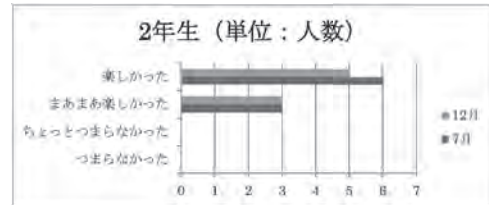
表6 平成22年度音読発表会児童アンケート

問1 音読の練習や発表をみてどう思いましたか

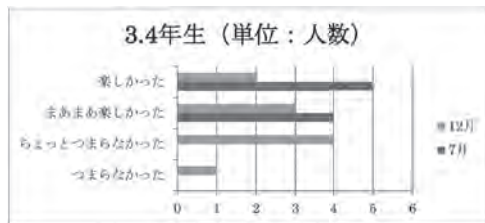
1年生



2年生

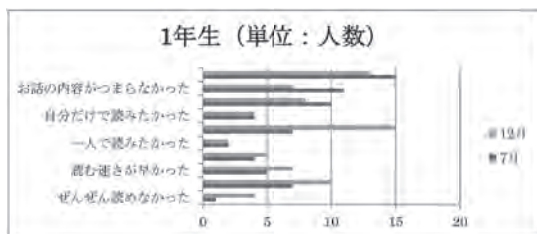


3・4年生

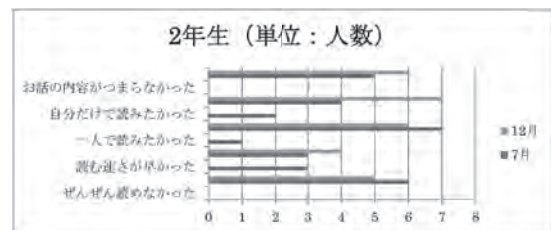


問2 音読の練習や発表をやっているとき、自分があてはまると思うものを選んでください。(複数回答可)

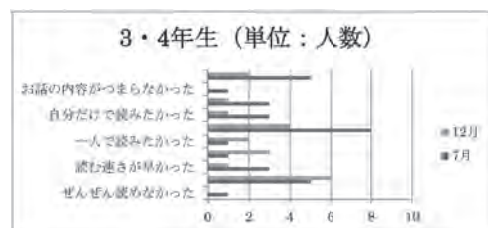
1年生



2年生



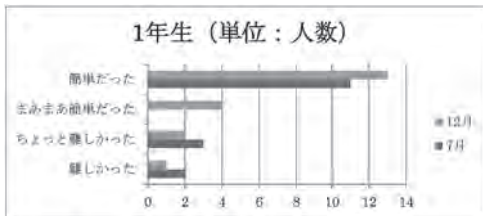
3・4年生



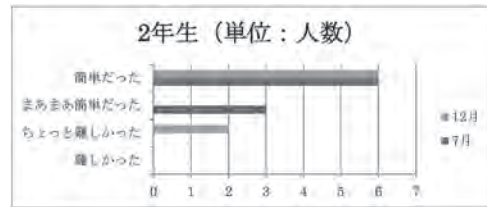


問3 音読の練習や発表の作品はどうでしたか

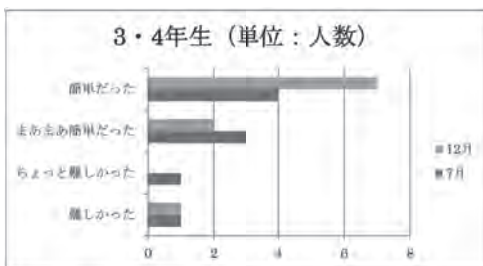
1年生



2年生

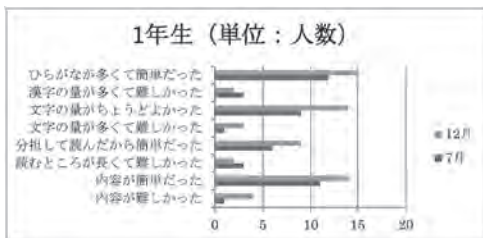


3・4年生

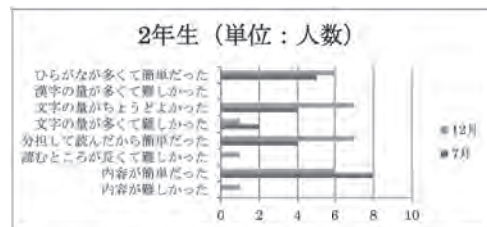


問4 音読した本について、自分が当てはまると思うものを選んでください。(複数回答可)

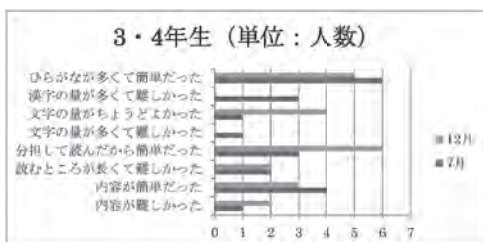
1年生



2年生



3・4年生

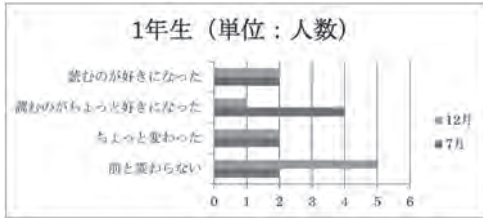




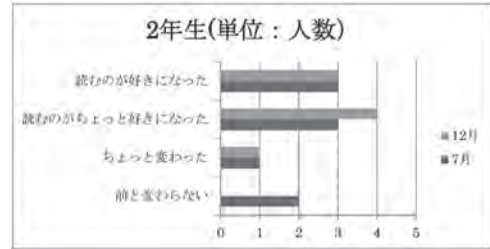
次世代育成における教育連携プログラム開発

問5 音読の練習や発表が終わって、どんなふうに感じましたか

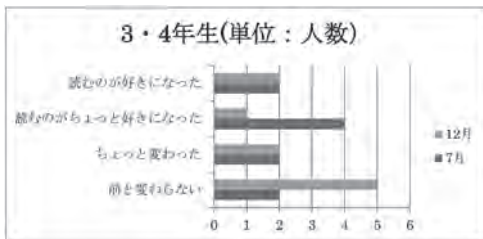
1年生



2年生

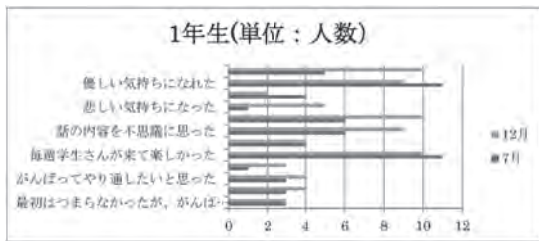


3・4年生

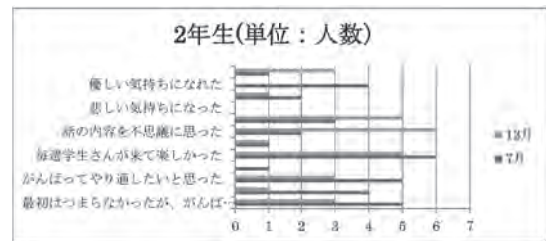


問6 音読の練習や発表をしてみて、あなたはどんなふうに感じましたか。

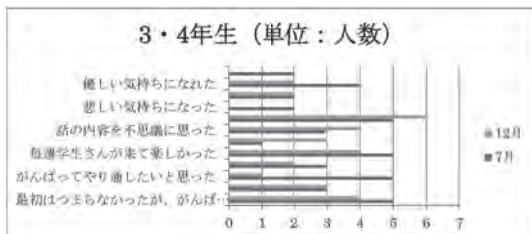
1年生



2年生



3・4年生



庄子 幸恵ほか

表7 アンケート自由回答について（音読会終了後の参加児童アンケート）

平成21年度
<ul style="list-style-type: none"> <li>・またみんなで音読練習をしたくて待ちきれない</li> <li>・前の音読発表会より楽しかった</li> <li>・来年も参加してみたい</li> <li>・全員でやった永訣の朝を読むことができてよかった</li> <li>・すごく緊張した</li> <li>・今回は夏の発表会とは違い、別の楽しみ方ができた</li> <li>・音読練習をしてスラスラ読めてきて楽しかった</li> <li>・最初は自信がなかったけど暗記もできた</li> <li>・初めての音読発表会で緊張したけど上手にできた</li> <li>・発表することがあまり好きではなかったけれど、今回の機会を通し、自信がついた</li> <li>・みんなでがんばったことがよかった</li> <li>・いろいろなお話を読むことができた</li> </ul>
平成22年度
<ul style="list-style-type: none"> <li>・すごく楽しかった 5名</li> <li>・金メダルをもらってうれしかった</li> <li>・おもしろかった</li> <li>・クラスみんなが大きな声で読めたのでよかった</li> <li>・良い音読練習になった</li> <li>・じゅげむや詩を小学校でも読みたい</li> <li>・ひとりだけで読みたかった</li> <li>・がんばれたと思う</li> <li>・練習が大変だった</li> <li>・学生さんがきびしかった</li> </ul>

表8 アンケート自由回答について（保護者の意見より）

平成21年度
<p>1) よかった点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学生の皆さんにリードしていただいたので、内気なわが子はハキハキと話している姿を見て驚いた</li> <li>・親しみが有り、参加しやすい雰囲気だった</li> <li>・学生の皆さんと仲良く楽しそうにしていた</li> <li>・子どもたちが一丸となって頑張ることが目標となっていたところ</li> <li>・子どもたちが楽しく参加できるゲームがあってよかった</li> </ul> <p>2) 改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・緊張感にかけており、発表がややだらだらしていたと思う</li> <li>・学生がおとなしかったので、もっと子どもと関わってほしい</li> <li>・もっと気持ちりがこめられるような楽しい内容にしてほしい</li> <li>・子どもたちの音読の時間が短かったのもう少し長い本でもよかった</li> </ul>
平成22年度
<p>1) よかった点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この体験は子どもたちがこれから学んでいく中で、大きな支え・力になってくれることでしょう、いい思い出となりました</li> <li>・音読のみにとどまらず、たくさんものをいただいたと思う</li> <li>・学校の本読みが大嫌いな娘でしたが、大学生のお兄さん、お姉さんにほめられたくて、暗記するくらい、がんばって取り組んでいました。やる気を引き出してくれた大学生の皆さんに感謝、感謝です</li> <li>・音読会近くになったときに、シールを貼ってもらうためにがんばって家で励んでいましたメダルもうれしそうにしていました</li> <li>・子どもたちにとって発声をするという機会が減っている昨今、少しでも声を出し、正しい日本語を話す時間を作っていたいただいたことはとてもよい経験になった</li> </ul> <p>2) 改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめは、がんばって練習していたが、だんだんやる気がなくなってきたので、もう少し工夫してやる気が持続するよう支援してほしい</li> <li>・音読もよいが、小さな子どもたちは絵を見ながら話を読んでイメージすることができるようになると思う。ただ、音読だけで終わってしまっただけでは子どもたちは音読はできるが何をいっているのか、どのような状況なのかもわからないのではないか</li> </ul>

## V 考察

平成 20 年「文部科学省・新学習指導要領各教科・国語」<sup>6)</sup>では、その目標を「国語を適切に表現し、正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」と掲げている。この中の「読むこと」について、その能力を育てるために「語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読すること」と書かれている。また、平成 16 年文化審議会答申<sup>7)</sup>では、国語教育の目標を、人間として持つべき感性・情緒を理解する力、すなわち、情緒力を確実に育成し、それによって確かな教養や大局観を培うことにあると述べている。そして、そのためには情緒力の形成にかかすことのできない読書が特に大切であり、「自ら本に手を伸ばす子どもを育てる」国語教育が必要であると述べている。そして、国語力をつける具体的な方法として、「文学的な文章において、気持ちや感情を十分に読み取ることができる。」、「古典（古文、漢文）の文章に親しむことができる。」をあげている。

上記の文部科学省の指導要領を受け、今回の次世代育成の活動目標を、平成 21 年度は

①学習習慣の形成と②コミュニケーション能力の向上とし、平成 22 年度の活動目標を

①学習習慣の持続、自主学習の習慣形成、②読む力、書く力、健康な体づくりを行うという設定した。

また、今回の次世代育成の活動を通して、保護者から次のような意見がよせられている。「核家族が多い中、近隣住民との関わりも少なく、人との関わりが少ない中で子どもたちは育っています。とてもよい経験を子どもたちはしていると思いました。音読の経験も素晴らしいですが、それ以上に人間学習ができることが、子どもたちにとって宝になると信じています。よい経験をありがとうございました。」この意見のように、保護者からの声をみると、大学生が放課後児童クラブの子どもたちと関わることは、児童と職員だけの環境に、別の年齢層が介入するため、人的環境の充実と学生との人間関

係による質的環境の充実と考えている保護者が多かった。学生の活動日は週 2 回であったが、「学生が来る日は子どもたちが楽しみにしていた。」、「お迎えに行くともまだ帰りたくない。」等、学生の存在を子どもたちは好意的に受け入れてくれ、その様子を見ている保護者は、学生の参加を評価しているということがいえる。小学生の教育活動に大学生が介入することは、彼らの心理的な活性感や子どもと学生のコミュニケーションから生まれる安定感が得られることが理解できる。

一方、学生の立場からは今回の活動は、これまでの教育実習や各種の資格取得のための実習とは異なり、①2 年間という長期にわたること、②学生の活動の自由裁量が大きいこと、③企画・指導はあるものの、保護者や子どもたちとじかに向き合い、その反応も率直であったことなど、常に創造性と積極性が要求された。打ち合わせの中で、小学校教育経験者や幼児教育経験者との話し合いの場を頻回にもち、学生たちと授業ではない教育支援活動を模索した。また、放課後児童クラブの子どもたちとは単なる仲良し大学生ではなく、適正な距離を保持しつつ、教育支援のために来ている学生であるという関係性をしっかり形成した。音読練習開始時と終了時のあいさつを必ず行ったことは、子どもたちに基本的な礼儀作法を教えるよい機会となったことと思われる。また、児童クラブの子どもたちにとっては、この 2 年間で最少でも 4 作品、最多では 10 作品の文章に触れることができた。書道についても文部科学省のカリキュラムでは小学校 3 年生から組み込まれている内容を小学 1 年生から実施した。学習障害のある特別支援を要する児童についても書道の時間はしっかりと集中して取り組む姿が見られた。習字を上手に書くよりも楽しく字を書くことに、指導者が心がけたことで、子どもたちには書道を楽しむよい機会となった。音読発表会後の子どもたちのアンケートをみても、ほとんどの子どもたちが音読を「楽しかった」と答えており、「(発表会に)また出たい」という意欲がみられた。一方、教材については自宅での音読練習をつんだ児童が多かったことから、(教材が)簡単だっ



たと答える児童が多く、今後、より各学年の児童に適した教材研究が必要であるということが示唆された。また、放課後児童クラブの職員も、学生が来ない日も児童クラブで最初に詩の朗読を行う、ランドセルは必ず棚にしまうなどの良い教育習慣を継続しできるように協力していただいた。また、教員の立場からも、学生たちがこの活動に取り組むことで、大学を卒業後、小学校教員となった学生や幼児体育研究所等の子どもの教育に携わる進路に多くの学生が進んだことで、この活動が有形無形に学生たちを育てたプログラムであったことを実感できた。

今後の課題としては、この活動が2年間であったため、4回の音読発表会実施の内容でしか評価できない点である。また、さまざまな作品に子どもたちは触れることができたが、各個人の子どもたちの学習への動機付けや音読の力、国語力の強化につながったかの評価については今後の縦断的な追跡が必要となってくると思われる。また、家庭環境が異なる子どもたちが集まる中での活動であったため、一部の保護者には発表会前の家庭での音読練習を負担と感じる家庭もみられた。このことについては、書面説明だけではなく、児童クラブの職員とも連携し、保護者への口頭での依頼と活動内容について説明し、保護者に理解を得る必要があると思われる。

地域と学校現場の教育連携について、先行研究では、地域側のメリットとして、①地域住民が、日々の生活の中から学んできたことを次世代に伝えるために、学校教育諸活動に参加・協力することによって、達成感や肯定間を感じ、今後の自己実現のための手段として、学習に対する意欲をよりいっそう高めることができる。②地域の活動に、学校の教職員の参加・協力を得ることで、教職員の持つ専門性や指導力を地域づくりや人づくりに活用できる。また学校側のメリットとして、①地域住民が有する知識や技能を活用することにより、学習と同時に実践と応用の一体的活動の展開が可能となる。②地域住民と活動することによって学校教育活動を情報公開することにもつながり、「開かれた学校づくり」が推進されるとともに、児童・生徒

の社会性を育むことができる。と述べている。<sup>8)</sup>

今回の研究の成果としては、①児童クラブにおける地域の大学生の学校支援ボランティアの活用により、児童クラブの生徒の学習意欲や国語力の向上に寄与できたことがあげられる。また、課題としては、①2年間の限られた活動だったことにより、その後の活動継続ができなかったことが、課題として残された。今後の方向性としては、大学のボランティアセンターを通し、コーディネーターが仲介になることにより、継続の可能性を探っていくことと、大学生が自発的に部活動を発足し、ボランティア活動を継続していく自発性が求められる。今回の研究では、教育連携プログラムの開発について、国語力の向上を中心に取り組みを行ったが、継続期間、評価方法はまだ不十分であり、今後も引き続き検討が求められる。

## VI. おわりに

今回の研究は、平成21、22年度「研究計画に基づく研究費・基礎研究 次世代育成における教育連携プログラムの開発 -放課後児童クラブから-」<sup>9) 10)</sup>に基づく研究である。S大学の有志学生が2年間、将来を担う次世代を支える子ども達への教育支援を行い、地域との教育連携の具現化に挑戦した。具体的な内容としては、F放課後児童クラブに通う小学生を対象に、音読支援を中心に2年間関わった。はじめは支援方法もまったくの手さぐり状態の中、小学校の授業参観からはじまったプロジェクトであった。学生たちもはじめの頃は、教師でもなく学生の立場でもない、子どもたちのお兄さんやお姉さんの立場で活動をスタートした。しかし、子どもたちが音読の教材に飽きてしまったり、学生のいうことをなかなか聞いてくれずに遊んでしまったりする場面に直面し、自分たちの指導方法のあり方や教材選びについて何度も教員とともに話し合いを重ね、悩みながら日々真剣に子どもたちに関わるようになった。一人ひとりに真剣に関わる学生の姿に日々関わるうちに子どもたちの音読に対する姿勢も徐々に真剣なものとなり、4度の音読発表会を通じ、児



童クラブの子どもたちも指導にあたった学生達もそれぞれに同じ達成感を感じることができたと思う。今回の活動では、地域の学生たちが地域の子どもたちを育て、そのことで自分たちも成長していくという、まさに次世代育成においてお互いの相互教育をはたす活動であった。学生達も今回の学びを今後の自分の成長に生かしてほしいし、学生たちから影響を受けた児童クラブの子どもたちも自分たちが大人に成長したときに同じように地域の子どもたちを育ててほしいと思う。地域間でお互いに関わりをもちながら教育連携を継続していくことが今後の地域の原動力になっていくことを学んだ今回の活動であった。

- 5) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長（2007）都道府県通知「放課後児童クラブガイドラインについて」
- 6) 文部科学省・小学校新学習指導要領（2010）第2章 各教科 第1節 国語
- 7) 文化審議会答申（2004）「これからの時代に求められる国語力について」
- 8) 岩手県教育委員会（2009）「社会教育と学校教育の連携・協力に関する研究」
- 9) 作山美智子（2010）次世代育成における教育連携プログラムの開発 平成21年度 研究報告書
- 10) 作山美智子（2011）次世代育成における教育連携プログラムの開発 平成22年度 研究報告書

（ 2012年11月30日受付 ）  
（ 2013年1月20日受理 ）

## 謝辞

今回の研究にあたり、最初から最後まで熱心に研究のご指導をいただきました作山美智子先生に心から感謝いたします。また、ともに学生指導に携わっていただいた庄子弘子先生、松井匡治先生ありがとうございました。また、小学生の指導についてご訓辞いただきました鈴木清子先生、F児童館館長の佐藤峰子館長、日下典子職員、また書道の指導をしていただきました大久保和子先生、学生たちの発音指導をしていただきました山内亨先生、そして最初から最後まで現場で子どもたちの指導にあたってくれたS大学の学生の皆さんに心より感謝いたします。どうもありがとうございました。

## 文献

- 1) 第31次宮城県社会教育委員の会議（2012）「家庭・地域・学校が連携・協働して子どもを育てる環境づくり」
- 2) 仙台市教育委員会（2011）「仙台市教育委員会の取組について」
- 3) 全国都道府県教育長協議会第2部会（2010）「家庭・学校・地域の連携による教育力向上のための方策について—家庭・学校・地域の教育力の向上を図る仕組み作り—」
- 4) 生涯学習研究 e 事典（2010）「地域社会の学校教育支援」